

TUFS日西交流400周年実行委員会協力

東京外国語大学附属図書館第14回特別展示

東京外国語大学とスペイン語



2013年11月20日(水)～12月22日(日) 於 附属図書館2Fギャラリー



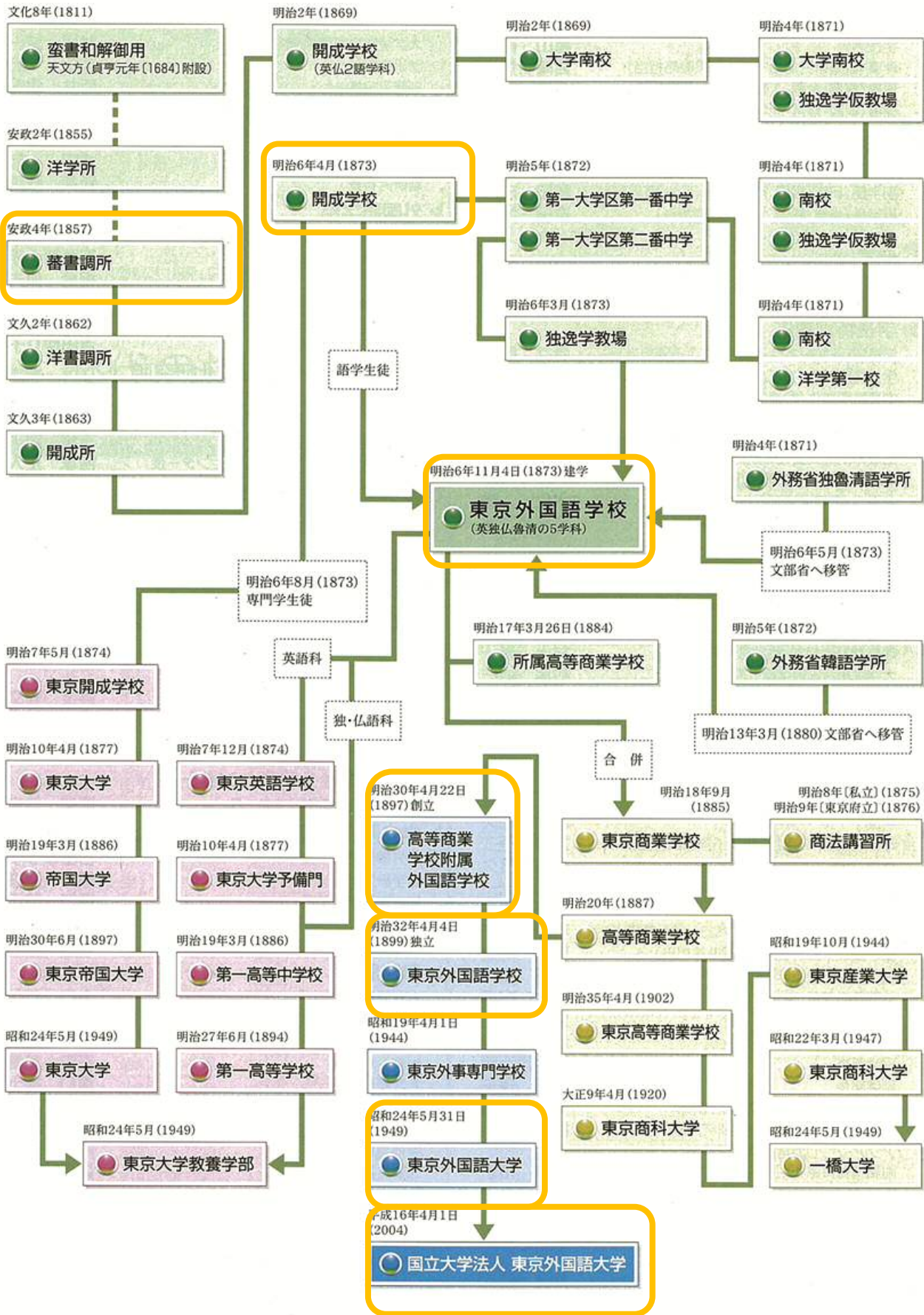
右: 東京外国語学校校舎

(1903年築 神田区錦町)

左: 現在の東京外国語大学校舎

(2000年築 府中市)

東京外国語大学沿革



「東京外国語大学データ集」平成 25 年度版から

ごあいさつ

東京外国語大学附属図書館では、毎年秋に特別展示会を行い、当館の蔵書をさまざまな切り口から紹介し、広く社会に公開しております。

「日本スペイン交流 400 周年」にあたる本年は『東京外国語大学とスペイン語』と題して、当館の所蔵するスペイン語教育、スペイン文学・文化にかかわる書物の類にスポットを当ててみました。

本学は1873年に東京外国語学校として建学されましたが、紆余曲折を経て1897年にあらためて高等商業学校（一橋大学の前身）に附設の附属外国語学校として創立され、1899年に東京外国語学校として独立を果たしました。その後、本学は我が国でもっとも伝統と権威のある外国語教育拠点であり続けてきました。なかでもスペイン語教育は、本学の創立当初から行われており、爾来110数年、きわめて重要な位置をしめてきました。

設置当時のスペイン語教育がめざしたのは、おもに中南米への経済的進出や移住事業で活躍する実務者の養成でしたが、教育研究を通じて卓越した文学研究者や翻訳家も輩出してきました。その流れは戦後の新制大学にも引き継がれており、東京外国語大学は我が国のスペイン語圏との文化的・経済的紐帯の拠り所である、と誇ることができます。

本展示では、本学のこうした伝統の一端を紹介しております。スペイン語教育、スペイン文学・文化への先達たちの好奇心や向学心に想いを馳せていただければ幸いです。主催者として喜びに堪えません。

2013年11月20日
東京外国語大学長 立石博高



展示ケース 1

今年 2013 年は、日西交流 400 周年にあたり、今年から来年にかけて、日本でもスペインでもこれを記念するイベントがたくさん開かれている（この展示もそのひとつだ）。この 400 という数字は、1613 年（慶長 18 年）に支倉常長率いる慶長遣欧使節団が日本を出発したことが根拠になっている。一行は太平洋を横断し、ヌエバ・エスパーニャ（現メキシコ）を経由して 1614 年にスペインの地を踏んだ。しかし、使節団が帰国するまでの間に日本ではキリスト教が禁止され、スペインとの通商が実現することはなかった。本格的な交流が始まるのは明治以降のことである。なお、いわゆる「開国」後、日本は外国といくつもの不平等条約を結ぶことになったが、その状況を乗り越えるきっかけとなる初めての平等条約の締結国は、スペイン語圏のメキシコであった（1888 年、明治 21 年）。

一方、東京外国語大学の起源は江戸幕府により 1857 年に開校された蕃書調所まで辿ることができるが、開成学校が発足した 1873 年（明治 6 年）が建学の年、その後の合併などを経て高等商業学校附属の機関として外国語学校のできた 1897 年（明治 30 年）が創立の年、東京外国語学校として独立した 1899 年（明治 32 年）が独立の年とされている。スペイン語は 1897 年、高等商業学校附属外国語学校付設と同時に設置され、以来 116 年に渡って本学で教授・研究が行われている。

実は、日本とスペインの関係は 1613 年以前から存在する（使節団を派遣するということは、その前から接触があったということだ）。その中でも特に知られている固有名詞は宣教師のザビエル（フランシスコ・ハビエル、1502-1552）だろう。彼は 1549 年から 1551 年まで日本でキリスト教の布教活動を行った。ザビエルはイエズス会の創立メンバーのひとりだったが、日本を訪れたこの修道会の会士たちが本国へ書き送った書簡がまとめて出版され、それが『耶蘇會士日本通信』として日本語に訳されている。これを訳したのは村上直次郎で、彼は東京外国語学校のスペイン語教授（1900-）から校長を務めた（1908-1918）。

また、1609 年には、当時スペインの植民地だったフィリピンのマニラ臨時総督の任を終えて帰国途中のロドリーゴ・デ・ビベーロの乗った船が台風に遭って難破し、現在の千葉県御宿町に漂着して地元の人々に助けられた。ロドリーゴ・デ・ビベーロは 1 年近く日本に滞在し、見聞録を書き残している。その日本語訳『ドン・ロドリゴ日本見聞録』をなしたのも村上直次郎である。

日本とスペインとの交流を研究する分野は日西交渉史などと呼ばれるが、その基礎を築くのに本学が貢献していたことになる。

展示ケース 2

大人が外国語を習得するには、その言語が話されている土地で生活しながらというのであれば、教科書や辞書が必要である。東京外国語学校でスペイン語が教えられるようになって最初の頃は、日本人向けに作られた教科書もなく、英語で書かれた教材をベースにして授業が行われていたという。辞書については、まず西英辞典を引き、さらに英和辞典で確かめるという手間のかかる方法で勉強していた。

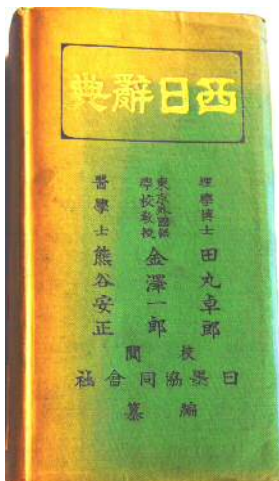
東京外国語学校の教員は、この不足を解消するために尽力した。篠田賢易の『西語初歩』（1915）はその成果の一つである（今回の展示には含まれない）。篠田は前述の村上の下で辞書編纂にも取り組んだが、志半ばで亡くなる。A から始まってFの途中までで中断した篠田の草稿が本学の図書館に保管されているという噂があって、今回の展示のために調査したのだが、残念ながら存在は確認できなかった。事実であれば貴重な資料として展示できたのだが・・・

ここに展示したのは、次の世代の教授で東京外国語学校第1回卒業の金澤一郎（1916-1930 教授）が書いた『西班牙语会話編』（1905）と、彼が校閲を担当した『西日辞典』（1925）である。

この『西日辞典』を実際に執筆したのは、移民としてメキシコに渡った村井二郎（東京外国語学校とは特に関係はない）で、アメリカで出版された西英辞典を日本語訳するという形を採った。



西班牙语会話編 第3版 金澤一郎著
大日本図書 1908



メキシコで西和辞典が書かれたことは意外に思えるかもしれないが、日本とスペイン語圏との関係の中で中南米の国々への移民が重要な位置を占めていたのだった。この辞典の特色として、日本語にローマ字が併記されていることが挙げられる。これは、漢字に不自由な彼の地の移民二世・三世への配慮であるという。

西日辞典 照井亮次郎，日墨協同編；金澤一郎[ほか]校閲
右文社 1925

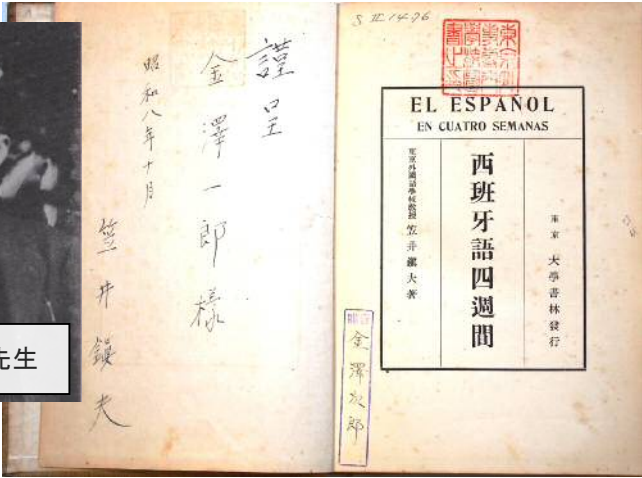
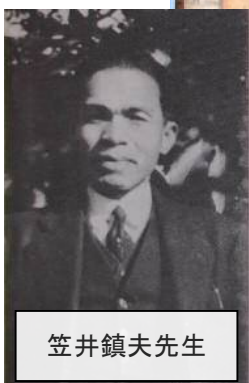
展示ケース 3

時代も昭和に入ると、スペイン語学習の環境がより整ってくる。

入門書としては1933年（昭和8年）に出版され、驚異的なロングセラーとなった『**スペイン語四週間**』が出ている（改訂されているので内容は同じではないが、『**スペイン語四週間**』として今も出版社のカタログに載っている）。著者は**笠井鎮夫**（1929-1958 教授）。

スペイン語四週間 笠井鎮夫著 大学書林 1933

1927年（昭和2年）に出版された『**西和辞典**』は、戦前の学習者にとって最も標準的なものだった。著者の**村岡玄**は本学出身者で、助手・講師を務めたこともあるが、その職を辞した後は個人としてスペイン語の普及に努力した。『**西和辞典**』も実質的には自費出版である。



西和辞典 村岡玄編 東京西班牙語學會 1927

また、1958年には戦後のスタンダードとして広く使われた**高橋正武**（1945-1947 教授）の『**西和辞典**』が出版される。この辞典は、1990年代に現在よく使われている辞書が現れるまで、事実上唯一の本格的な西和辞典だった。

笠井も高橋も本学出身で本学で教鞭をとった。日本でスペイン語を学んだ多くの人たちが、教室であれ、本や辞書を通じてであれ、本学との接点を持っているということになる。

展示ケース 4

現在では、スペイン語学習の選択肢も増え、昭和時代のように市場を独占するような学習書も辞書もない。ここに展示されているのは、1980年ごろ本学の授業で使われていた文法の教科書、『新基本スペイン文法』（宮城昇著）（1963-1982教授）と今年度1年次の文法の授業で使われている教科書（『スペイン語1年生教科書』東京外国語大学スペイン語教室編）である。

辞書は本学の現役教授が監修した『西和中辞典』。これは電子辞書やスマートフォンのアプリにもなっている。



【左】旧教科書『新基本スペイン文法』
宮城昇著 白水社 1971

【右】新教科書『スペイン語1年教科書』
東京外国語大学スペイン語研究室編
2013

展示ケース 5

スペイン語は「セルバンテスの言語」とも呼ばれる。ミゲル・デ・セルバンテス（1547-1616）は『ドン・キホーテ』の作者として知られるスペインの作家で、スペイン語圏の文学を代表する、ちょうど英語にとってのシェイクスピア（1564-1616）のような存在である（偶然、死んだ年も同じ）。

セルバンテスの代表作『ドン・キホーテ』は同時にスペイン語文学の中で最も有名な作品で、これを翻訳することは、文学研究者にとって大きな挑戦である。大部の小説で、いわゆる「前編」が1605年に出版され、「後編」が1615年に現れた。

本学の教員でこれに取り組んだのは、まず永田寛定（1918-1945教授）で、「正編（＝前編）」が1948年から1951年にかけて出版された（岩波文庫3分冊）。続

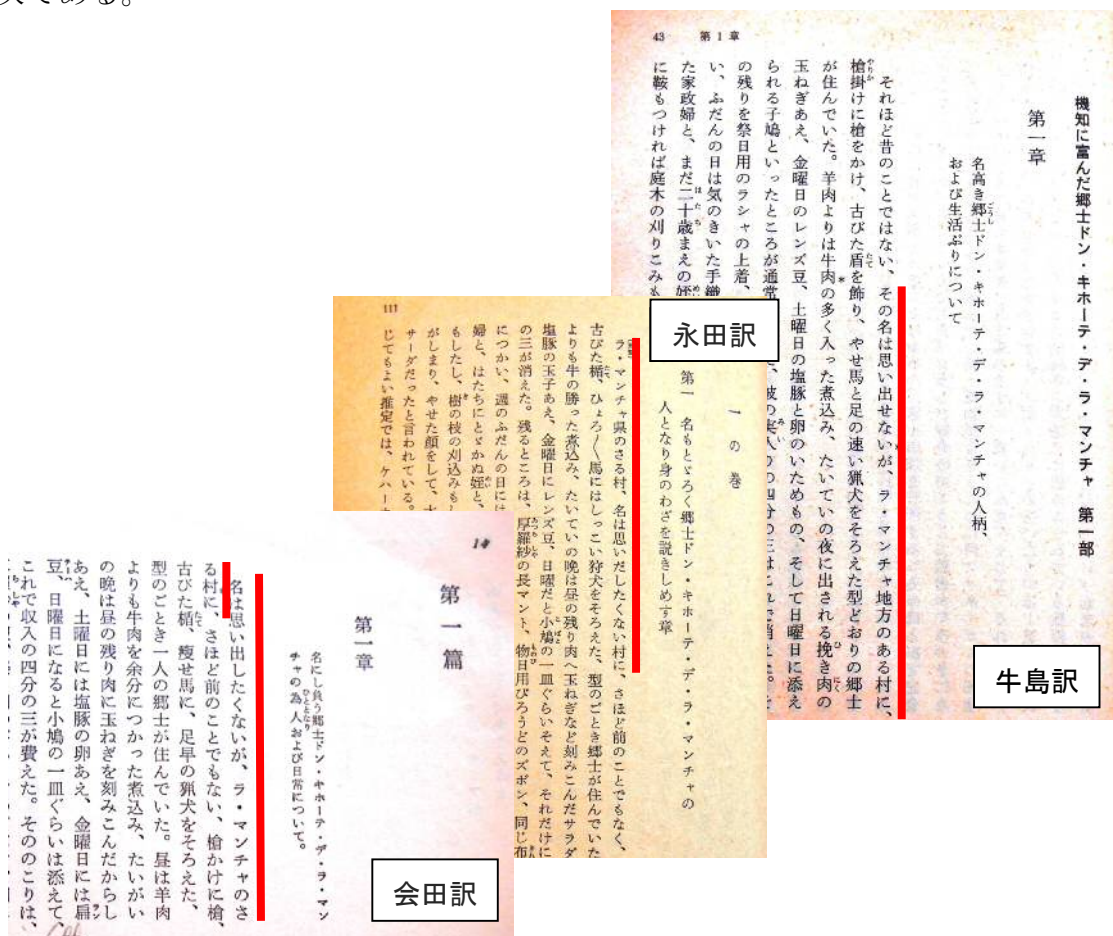
編（＝後編）は3分冊のうち1冊目は1953年に出版されたが、既に出た正編の改訂などをはさみ、続編（二）の出版を見ずに亡くなった。その後、高橋正武が恩師永田の遺志を継ぎ、続編（二）の注をつけ、さらに永田が訳さず残した章を訳して続編（三）として出したのが1977年のことである。

日本で初めて個人で前後編を訳しきったのは会田由（1955-1965教授）で、1960年から1962年にかけて出版された。

そして牛島信明（1985-2002教授）の翻訳が出たのが1999年のこと。

『ドン・キホーテ』を訳するためには、作品そのものを読み込むことはもちろん必要だが、作品に関して何世紀にもわたって蓄積されてきた膨大な研究を読む作業が欠かせない。

たとえば、有名な前編第1章の書き出し《En un lugar de la Mancha, de cuyo nombre no quiero acordarme》を、永田は「ラ・マンチャ地方のさる村、名は思いたくはない村に」、会田は「名は思い出したくないが、ラ・マンチャのさる村に」と訳している。しかし牛島訳は「その名は思い出せないが、ラ・マンチャ地方のある村に」である。これは、かつて「思い出したくない」と解釈されていた《no quiero acordarme》は実は「思い出せない、名前が出てこない」という意味なのだという研究があり、近年はこちらの解釈が採られるようになってきていることの反映である。



展示ケース 6

『東京外国語学校一覧』の明治 33・34 年（1900-1901 年）版(p. 11)によれば、本科（3 年制）の授業時間は語学が週 24 時間、体操が週 3 時間となっている。これがもし実時間だとすると、現在の外大生が地域言語 A の授業として受けている週 7.5 時間の 3 倍以上の数字となる。教材などが整っていなかったことを差し引いて考えても、かなりの運用力がついたのでなかろうか。

明治 37・38 年（1904-1905 年）版には卒業生総代がスペイン語で述べた謝辞が収録されている。教員の手が入っているのではあろうが、格式張ったスタイルを駆使して書かれた、なかなか立派な文章である。

初期の卒業生の就職先も、この『東京外国語学校一覧』から分かる。それによると、農商務省海外派遣実業練習生としてメキシコ、ペルー、アルゼンチンに行っていたり、商社に勤めたりという例が目立つ。特に当時の状況を良く表しているのが移民を送り出すための移民会社への就職である。英語科の卒業生たちの中には教師になる人が目立つのに対して、スペイン語は当初から「実学」指向で、しかも即戦力として社会に出ていたことが分かる。

第二章 學科課程
 第四條 本校學科及課程ヲ定ムルコト左ノ如シ
 各語學科課程
 第一年 第二年 第三年
 語學 毎週二十四時間
 體操 同 三時間

但シ清語學科韓語學科ニハ此外ニ漢文毎週三時間ヲ得
 佛獨露伊西清韓語學科二年級以上ノ生徒ハ其志望ニ依リテ

本科授業時間

Señor Ministro, Señores.
 Grande es el honor que V. E. Sr. Ministro y I. pensan asistiendo á este acto en que vemos premiado n. y os agradecemos profundamente honra tan insigne.
 No ha mucho tiempo y por causa de todos conocidas, rompióse la paz en Extremo Oriente, declaróse la guerra y desde ese momento, nuestros ejércitos vencedores en mar y tierra, marchan de victoria en victoria al triunfo final que ha de asegurarnos, entre las Naciones civilizadas, el puesto prominente á que tenemos derecho y que ha de ensanchar, en consecuencia, el círculo de nuestras relaciones de amistad y comercio con los otros pueblos, desarrollar nuestra industria, aumentar nuestra riqueza y desenvolver, en una palabra, las energías todas de la Nación; pero, ni las relaciones se estrechan, ni la industria se desarrolla, ni la riqueza se aumenta, sin estar en contacto íntimo, directo con los otros pueblos, contacto imposible de obtener sin conocer, hablar, y escribir sus lenguas, labor ardua, difícilísima á que hemos consagrado nuestra actividad entera, y á la que continuaremos dedicando nuestros esfuerzos, nuestra inteligencia, nuestro trabajo. Si, hasta ahora muy importante era ese estudio, pero más, mucho más, lo será á partir del día no lejano, en que nuestra amada Patria alcance la victoria que asegurándole una paz duradera, abra ante ella las puertas de un porvenir brillante de prosperidad, de riqueza é influencia.
 A nosotros nos toca, soldados del estudio, aprovechar de los triunfos de nuestros hermanos, en los campos de batalla y obtener en las luchas comerciales nuevos triunfos que no por incruentos son menos gloriosos; á nosotros nos toca acabar la tarea comenzada, trabajando con tesón y sin desmayos, para que así, nuestro esfuerzo individual, corto y humilde, unido al de los otros haga de nuestro pueblo una Nación tan próspera como fuerte y tan fuerte como próspera.
 Solo me resta cumplir con el deber, para mí gratisimo, de dar las gracias al Señor Director por la eficaz ayuda que durante la carrera nos ha prestado, y á los Señores Profesores por sus sapientísimas enseñanzas. He dicho.
 Y. MORI.

卒業生總代謝辭

展示ケース 7

東京外国語大学の学生の活動で、100 年以上の歴史を持つもののひとつに語劇がある。これは、学生たちが自分たちの専攻する言語で劇を上演するというもので、スペイン語については 1902 年（明治 35 年）の「講演会」でブレトン作の喜劇を上演したという記録が残っている（このブレトンはマヌエル・ブレトン・デ・ロス・エレロス 1796-1873 のことかもしれないが、作品名が不明なのでよく分からない）。以来、その伝統は今年度のロベ・デ・ベガ（1562-1635）作『フエンテ・オベフーナ』に至るまで連綿と受け継がれている。

現在、語劇は毎年の外語祭で上演され、スペイン語で書かれた演劇作品を紹介する役目も果たしている。過去には、卒業後、学内外の学生・社会人の有志を集めてスペインで日本人によるスペイン語劇を上演するという「暴挙」を達成した強者もいる。今年の日西交流 400 周年を記念し、スペイン国立セルバンテス文化センター東京校における首都圏の 4 大学（神奈川、上智、清泉、本学）による語劇企画に参加することになっている。

最近の演目は、フェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898-1936）作『ドニャ・ロシータ（2007 年度）』、ホセ・ソリーリャ（1817-1893）作『ドン・フアン・テノーリオ（2011 年度）』、ミゲル・デ・セルバンテス作『離婚係の判事さん（2012 年度）』など。学生たちが作ったパンフレットは、いかにも今の若者風の体裁だが、年度ごとの個性も現れている。



★最近の語劇（左から順に）

『〈語劇〉写真速報』2011, 2012

『第 90 回外語祭 スペイン語劇

El juez de los divorcios

～離婚係の判事さん～』

（2012 年度パンフレット）

学生たちは語劇以外の活動にもそれぞれ活発に関わっているが、本分はもちろん勉学である。本学は地球社会化時代における教育研究の拠点大学をめざして、2012 年度（平成 24 年度）、それまでの外国語学部を言語文化学部・国際社会学部の 2 学部へ改組した。しかし、1 つの言語とその地域について集中して学ぶという点では、どちらの学部も変わらない。1 年次 2 年次では「地域言語 A」として週 90 分 5 コマの授業がある（外国語学部時代よりも 1 コマ減っている）が、学部別のクラス分けをせずに、両学部の学生が同じ教室で授業を受けている。本学から「〇〇語学科」という区分が無くなって既に 20 年近くになるが、未だに「スペイン語科」（学生たちの間では「スペ科」）という言い方が普通に使われている。それほどまでに言語による繋がりは強いのである。

今年度までは、それぞれの学部で開かれる専門のゼミで学ぶ 3・4 年生がいないので、2 学部の違いがまだ見えにくいですが、来年度から学部ごとの特色を活かした授業が本格的に始まる。1・2 年次で学んだスペイン語をベースに、21 世紀の地球社会に貢献できる人材に育ててくれることが期待される。

【解説】 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授
川上茂信（かわかみ しげのぶ）

展示資料一覧

| 資料名 | 請求記号 |
|--|-----------------|
| ケース 1 | |
| 1. 『耶蘇會士日本通信』 豊後篇 上・下 村上直次郎訳註 帝國教育會出版部 1936 | J/IV/2178 |
| 2. 『ドン・ロドリゴ日本見聞録 ; ビスカイノ金銀島探検報告』 村上直次郎譯註 駿南社 1929 | J/IV/2601 |
| ケース 2 | |
| 3. 『西班牙語会話編 = Manual de la conversacion y vocabulario』 第 3 版 金澤一郎著 大日本図書 1908 ※初版は 1905 年 (明治 38 年) 発行 | P/a7/35 |
| 4. 『西日辞典』 照井亮次郎, 日墨協同編 ; 金澤一郎[ほか]校閲 右文社 1925 | S/I/1465 |
| ケース 3 | |
| 5. 『西班牙語四週間』 笠井鎮夫著 大学書林 1933 | S/II/1476 |
| 6. 『西和辞典』 村岡玄編 東京西班牙語學會 1927 | P/a3/2 |
| 7. 『西和辞典』 高橋正武編 白水社 1958 | P/a3/3 |
| ケース 4 | |
| 8. 『新基本スペイン文法』 宮城昇著 白水社 1971 | P/a7/61 |
| 9. 『スペイン語 1 年教科書』 東京外国語大学スペイン語研究室編 東京外国語大学スペイン語研究室 2013 | P/a7/701830 |
| 10. 『小学館西和中辞典』 第 2 版 大森洋子 [ほか] 編集委員 小学館 2007 ※本学現役教員である高垣敏博教授が監修 ※初版は 1990 年発行 | P/a3/623799 |
| ケース 5 | |
| 11. 『ドン・キホーテ』 改版 全 6 冊 (岩波文庫) セルバンテス作 ; 永田寛定訳 岩波書店 1971-1978 ※初版は 1948 年-1977 年発行 | A/9P-8/C419/1~6 |
| 12. 『セルバンテス』 全 2 冊 (世界文學大系第 10,11 巻) セルバンテス著 ; 会田由訳 筑摩書房 1960-62 ※10 巻が「ドン・キホーテ」の前編、11 巻が後編にあたる | A/909/1/10~11 |
| 13. 『ドン・キホーテ』 全 6 冊 (岩波文庫) セルバンテス作 ; 牛島信明訳 岩波書店 2001 ※1999 年に発行された牛島信明による新訳の岩波文庫版 | 文庫/13/721-1~6 |

ケース6

『東京外国語学校一覽』 從明治 33 年至明治 40 年 から

14. 「本校卒業生總代謝辭」 明治 37・38 年版 113 頁

TUFS/6/1-1/00-07

15. 「本校卒業生及其就職ノ場所」

明治 39・40 年版 104-105 頁

ケース7

16. 『東京外語スペイン語部八十年史』 別巻

「東京外語スペイン語部八十年史」 刊行会 1982

A/377/186/2 ㍿

17. 『<語劇>写真速報』 2012

東京外国語大学「語劇支援室」 2012

個人蔵

18. 『第 90 回外語祭 スペイン語劇

El juez de los divorcios : 離婚係の判事さん』

個人蔵

外語祭スペイン語劇広報班 2012

表紙画像：『西日辭典』（照井亮次郎，日墨協同編；金澤一郎[ほか]校閲）

東京外国語大学 スペイン年 イベント情報

スペイン年にちなんで学内外で様々なイベントが開催されます。こちらもお出かけください。

2013 年 11 月 22 日（金） 13 時 30 分～15 時 30 分

東京外国語大学 研究講義棟 101 教室（マルチメディア・ホール）

東京外国語大学「外語祭学長特別講演」

立石博高学長「スペインの宮廷画家ベラスケス—歴史家が芸術を語る—」

2013 年 12 月 7 日（土）

テアトロ・エスパニョール・マラソン セルバンテス文化センター

神奈川大学、上智大学、清泉女子大学、東京外国語大学のシアターグループによる日本語

字幕付スペイン語劇を開催 ★本学上演作品は、ロペ・デ・ベガ作『フエンテオベフーナ』

2013 年 12 月 11 日（水） 17 時～19 時 10 分

東京外国語大学アグラグローバル（プロメテウス・ホール）

「東京外大フラメンコのタベ—逢坂剛氏を迎えて—」（後援：イスパニア会）

17:00～18:20 逢坂剛氏講演会 / 18:30～19:10 外語大スペイン舞踊部公演

詳細は、「TUFS 日西交流 400 周年実行委員会」の HP にてご確認ください。

<http://www.tufs.ac.jp/common/gl/S/index.html>

